

# エゾヤマザクラの開花特性

佐藤孝夫

日本人はサクラの好きな国民である。サクラの開花に関する情報は春になると毎日のように新聞やテレビ・ラジオをにぎわす。サクラの開花は1月中旬沖縄のヒカンザクラに始まり、その後はソメイヨシノの開花前線が日本列島を北上し、東京では3月下旬に開花する。本道には4月下旬～5月上旬に上陸し、樹種は主にエゾヤマザクラとなり、5月下旬には根室に到着してチシマザクラの開花となって、サクラ前線の一応の終結をむかえる。同時にサクラ前線は平地から亜高山へと上がっていく。

サクラといえば日本全体ではまさきにソメイヨシノがあげられるが、寒冷な北海道では生育が思わしくない地域がほとんどである。本道でもっとも広く親しまれ、植栽されているのはエゾヤマザクラである。エゾヤマザクラといっても個体によって花のつきぐあい、花の色や大きさなどが異なっていることは経験的に知られているものの、詳細な調査はほとんどなされておらず、その個体変異の大きさについての資料も少ない。

そこで、開花特性に優れているとされる個体を全道から収集し、つぎ木で養成した苗木を1977年から同一条件下で植栽し、育成してきた。現存する114個体の中から開花量や花の色、樹形などから1次選抜した33個体について、開花特性の調査を1990年と1991年の2年間行った。なお、調査木の平均樹高は7.6m(4.1～11.0m)、平均胸高直径は13.2cm(5.0～21.5cm)である。

## 早く開花する個体がある

サクラの開花日や開花期間は年によって異なっていることは知られているが、同じ種類でも開花が早い個体や遅い個体があるのだろうか？

33個体の1990年と1991年における開花してからすべての花が落下するまでの期間を図-1に示した。1990年では、早い個体は4月24日から開花がみられ、遅い個体は5月7日に開花した。もっとも多くの個体が開花したのは5月1日であった。また、1991年では早い個体は5月2日に、遅いものは5月10日に開花した。もっとも多くの個体が開花したのは5月6日であった。このように、開花日は同じ年でも個体によって大きく異なっており、8～13日間の開きがあった。そして1990年に開花が早かった個体は1991年も早く、遅かった個体は遅い傾向がみられた。エゾヤマザクラの開花日は開花前の気温に、また開花期間の長さは開花後の天気や気温・風の強さなどに強く影響を受けるために、年による差が生じるものと思われる。しかし、個体間の開花日の相対的な遅速は、両年とも同じような傾向があることから、各個体に特有な性質であり、個体によって開花の遅速は毎年決まっていると思われる。これは気温に

対する開花機構の反応が個体によって異なるためであろう。

また、個体別にみた開花期間は1990年が5～16日間（平均10.0日間）、1991年が3～9日間（平均5.8日間）であった。1990年に開花期間が長かった個体は1991年も長いといえなかった。しかし、両年とも平均の開花期間を上回る個体もみられた。

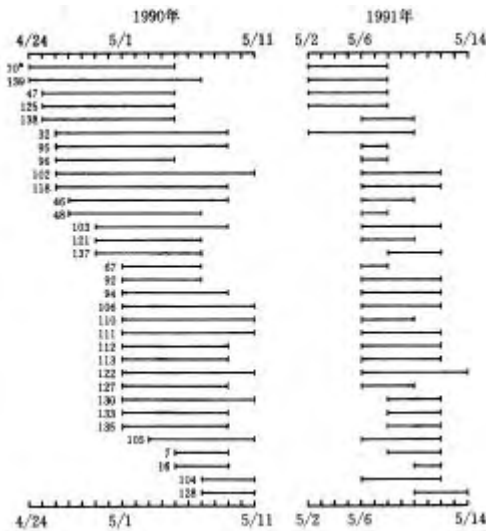


図 - 1 1990年と1991年の個体別開花期間の比較  
： 個体 No.

### 花の量が多い個体がある

開花量も個体によって異なることは知られているが、花を多くつける個体は毎年同じように多くの花をつけるのだろうか？

1990年と1991年の個体別の開花量の関係を図-2に示した。開花量は個体によって著しい差があり、植栽後十数年たっても数個しかつけないものから2000個以上の花をつけるものまでみられる。また、同一個体でも年によって開花量は異なっている。しかし、両年の開花量には高い正の相関がある（相関係数0.684、1%水準で有意）ことから、開花量の多い個体は毎年多くの花をつける傾向があり、開花量の少ない個体では多くの花を

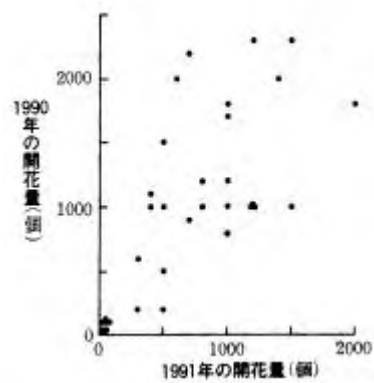


図 - 2 1990年と1991年の個体別の開花量の比較

つけることはないと思われる。なお、樹高の小さな木では花の量が少ない傾向がみられたが、中程度以上のものでは樹高の高さと花の量との相関は認められなかった。

### 花の色が濃い個体がある

花の色も個体によって異なっている。つぼみの時の色は紅色または濃紅色がほとんどであるが、まれに淡紅色のものもみられる。しかし花が開くにしたがって徐々に淡い色になる。開花時における花の色は、白色に近い淡紅色、淡紅色、やや濃い淡紅色に区分され、淡紅色が全体の約 70% を占め、他の 2 色はほぼ同じ割合であった。このように、花の色は個体特有の色をしており、ごく淡い紅色からやや濃い紅色までであることがわかった。

### 花の大きい個体がある

花の大きさ（直径）は個体内での変異の幅は小さいが、個体別では幅があり、最小 2.9cm，最大 4.3cm，平均 3.7cm であった（図 - 3）。このように、花の大きさは変異の幅が大きく、個体間に明らかに差が認められる。また、花の大きさは開花量、葉の大きさ、樹高などとの相関はみられず樹体の大きさなどには関連がない形質と思われる。

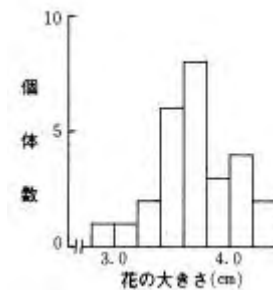


図 - 3 個体別の花の大きさの頻度分布

### 花びらの大きさと形にも違いがある

花びら（花弁）の大きさは個体内での変異の幅は小さい。しかし個体別にみると、花びらの長さは 14.4 ~ 20.6mm，平均 17.4mm，幅は 10.8 ~ 18.0mm，平均 14.7mm であった。このように、花びらの大きさは個体間の差が大きく、個体ごとに違いがみられた。

花びらの形は個体内ではほぼ同じ形をしている。しかし、個体ごとにみると形に違いがあり、大別すると円形、卵形、長卵形、楕円形の 4 つに区分される。このうち卵形または楕円形の個体が多い。しかし、卵形で小さいもの、円形で大きなものなど、花びらの形にも個体による特徴がみられ、なかでもハート形をしたものが 1 個体あった。

### 花の特性による個体の選抜

エゾヤマザクラには開花時期や開花量、花の色、花の大きさ、花びらの大きさや形などに個体間の差があることが認められた。そこで、一次選抜した 33 個体の中からさらに 11 個体を選び、各特性をまとめ一覧表に示した（表 - 1）。

表 - 1 エゾヤマザクラ選抜個体の特性一覧表

個体 No.	産地(支庁)	開花量	開花時期	花色	花の大きさ	樹高	その他
94	日高	多	中	淡紅	中	中	
95	日高	やや多	中	白	中	中	
96	日高	中	早い	紅	中	中	
102	空知	やや多	中～早	紅	大	中	
110	根室	やや多	中	淡紅	大	低	
111	上川	多	中	淡紅	中	高	
122	十勝	多	中	淡紅	中	中	
130	空知	やや多	中	白	中	高	
135	胆振	やや多	中	淡紅	中	高	花びらがハート型
138	留萌	中	早い	淡紅	中	中	
139	釧路	中	早い	淡紅	大	中	

: 選抜の対象とした項目

開花量	開花時期	花の色
少: 100 個未満	早い	紅: やや濃い淡紅色
やや少: 100 ~ 500 個未満	中	淡紅: 淡紅色
中: 500 ~ 1000 個未満	遅い	白: ごく薄い淡紅色
やや多: 1000 ~ 1500 個未満		
多: 1500 個以上		

花の大きさ	樹高
小: 3.5cm 未満	低: 7m 未満
中: 3.5 ~ 4.0cm 未満	中: 7 ~ 10m 未満
大: 4.0cm 以上	高: 10m 以上

選抜された 11 個体は、開花量の多い個体が 3 個体、開花の早い個体が 3 個体、花の大きな個体が 3 個体、花色の濃い個体と薄い個体が各 2 個体、花びらの形に特徴のある 1 個体（重複するものがある）である。

なお、花びらの数が多いもの（いわゆる八重咲きなど）、枝垂れているものなども鑑賞価値があり、選抜の対象となる。しかし、今回の調査木の中ではこのような形質を持った個体はみられなかった。今後このような特徴をもった個体が選抜されることが期待されている。

#### 開花特性に特徴のある個体の利用方法

エゾヤマザクラにおける優良個体の基準は単純ではなく、多数の要素があげられる。これらの要素を全部かねそなえた個体が修景効果や鑑賞価値が高い。しかし表 - 1 に示すように、そのような理想的な個体は現在までのところ見当たらない。そのため、それぞれ特徴をもった個体を用意し、それぞれの植栽目的にあわせて、単独あるいは組み合わせて植栽することにより、より効果的な修景緑化をはかることが大切である。

例えば、公園などにサクラを植栽し花見の名所をつくる場合は、できるだけ特徴のある個体を多数混植すると良い。すなわち、サクラ類の鑑賞価値は花にあり、とくに開花量の多さにあることから、花つきの良い個体をまず植える。また、開花の早い個体も早くから花見ができる

ことから植えたいものである。さらに開花の遅い個体も混ぜて植えることによって、花を鑑賞する期間が長く保てることになる。そしてこれらの中には花の色も白色に近い淡紅色からやや濃い紅色までのいろいろな花色や花の大きなものなどがそろっていることが望ましい。

一方、街路樹などに用いる場合は樹形や花の時期、花の色などに統一性がとれていることが望ましい場合が多い。そのため鑑賞価値の高い花のつきの良い個体など、特定の特徴をそなえた個体を植えると良いと思われる。

( 樹 木 科 )